

# 韓国遺存の角筆文献調査報告

小林 芳規

西村 浩子

## 一、韓国における角筆文献の調査経緯

中国大陸における、漢代の木簡を始め、五世紀初頭から十世紀までの各世紀に書写された敦煌文献の墨書漢文に、角筆の凹みによる漢字や符号の書入れられていることが、小林らの現地調査によって、明らかになった(1)。日本でも、奈良時代の正倉院文書を始め、平安時代から大正時代までの各時代にわたり、角筆が使われ三千点を超える文献の遺存していることも分つて来た(2)。中国大陸で角筆が曾て使われ、日本列島の各地でも角筆の使われたことが判つてみると、日本の古代文化史上、高度な大陸の文化を摂取するに当り、地理的に重要な位置を占め、その役割を果たした朝鮮半島においても、角筆が使われ、その古文献が遺存するであろうことは、予想される所であった。

その予想が現実のものとなる機会が幸いにも訪れた。二〇〇〇年二月下旬に、西村は、松山大学に來られていた韓国の建国大学の金容福名誉教授に調査の便を依頼し、同教授の帰国の折に渡韓して、同教授のお世話により、ソウル市の建国大学校常虚紀念図書館において貴重書類を調査して、角筆によると見られる凹みの線を施した

文献を五点見出した(3)。時に二月二十三日〜二十五日であった。五点は次のようである。

① 洪範 一冊 写本 古 148.6/辛 45

「辛丑九月二十八日庚寅立冬朝露土達西方黒雲走天東方□□日暖□□」(後表紙見返、墨書)

○二十八宿列星図の八角形の図の下絵線が角筆の凹みで施されている。

② 孔聖家語 三冊(天・地・人) 古 151/2-11「/1

肅宗三十年(一七〇四)頃刊

○上欄に段落の始まりを示すと見られる斜線が角筆で施されている。その箇所にも墨点も付けられている。

③ 大慧普学禪師書 一冊 古 184/后 94

「書代 崔末鎮」(表紙、墨書) 「世尊應化二九六六年九月」(後表紙、墨書)

○文の切れ目に書入れたと見られる角筆の斜線がある。

④ 古文真宝 七冊 古 928/后 14「/后-1

○角筆で施したと見られる線があるが、働きは未詳。

⑤ 古今歴史標題註釈 十九史略通 一冊 古 222.01/

○一部に角筆による斜線二本と「〇」のような符号があるが、働きは未詳。

次いで、西村は、二月二十五日に檀国大学校東洋学研究院を訪れ、偶々手にとった經典の中に角筆の書入れのあることを見付けた。次の文献である。

⑥地蔵菩薩本願經 一冊 雍正八年（一七三〇）刊

（刊記）「雍正庚戌四月日全羅道順天地桐裡山大興寺開刊」

○角筆の節博士（小林が節博士と認定）

更に、西村は、ソウル市内の古書店で求めた古書のうち三点に角筆の書入れを見出した。中でも、「中庸章句大全」一冊（「乙丑四月嶺管重刊」刊記）には、表紙に角筆で「中庸／中庸 論語曰」等の漢字が書入れられていた。

小林は、西村の撮影した紙焼写真により、図の下絵線や段落を示すと見られる斜線の凹みが、日本の古文献に見られる角筆文字や絵の凹みと同じであること、又、「中庸章句大全」の表紙に書入れられた漢字が、明らかに角筆による凹みであることを確認した。

そこで、小林は、西村と小林節子と共に、韓国における角筆文献の発掘調査に踏み切った。

調査に先立ち、小林は兼ねてより面識のある南豊鉉教授（檀国大学校、現・名著教授）に、調査の意図を伝え、その便宜と協力をお願いしたところ、早速に快諾が得られた。

訪韓調査は次の日程で行われた。

平成十二年七月二日（日）～七月九日（日） 八日間

調査は、南教授が設営された次の四大学校と一博物館とで行った。

檀国大学校東洋学研究院資料室 七月三日

東国大学校中央図書館 七月四日

高麗大学校中央図書館 七月五日

誠庵古書博物館 七月六日、八日

延世大学校中央図書館 七月七日

各大学校では、一六〇〇年以前の貴重書については、図書館職員の下、或いは丁捲りのもとで閲覧調査したが、図書館・資料室の関係各位の厚意と温かい御世話を頂いた。又、誠庵古書博物館では、趙炳舜館長の格別なる好意的な御厚情により、初雕高麗版等の貴重書の数々を親しく拝観調査させて頂いた。その結果、予定通りに調査を遂行することが出来た上に、調査した四大学校の総てから角筆文献が見出され、更に、誠庵古書博物館からは、初雕高麗版に角筆でフコト点と口訣とを施した文献も発見されて、大きな成果を収めることになった。その発見点数は、三十一点に及んでいる。これも、南教授を始め、李丞宰教授、康仁善副教授、尹幸舜助教授の御世話と御協力の賜物である。

以下に、三十一点の角筆文献について、各文献ごとに角筆の書入れの内容とその発掘の状況を記す。

一、檀国大学校東洋学研究院資料室 七月三日

蔵書目録を拝見した後、書庫に入れて頂き、韓国漢籍の書架と仏書の書架を一巡して目星をつけた上で、別置してある、墨書口訣の書入れられた漢籍について角筆書入れの有無を一冊一冊点検し始め、小林が角筆の線を施した次の三点を見付けた。

⑦近思錄 元、亨、利、貞 四冊 10S/152.41/平186」

十七世紀刊 角筆の斜線等が漢字に施されている。

⑧ 孟子卷第一 一冊 148.4/℞ 694.2  
十九世紀刊 角筆の斜線が漢字に施されている。

⑨ 大極図説外 一冊 105/152.41/℞ 128.E

十九世紀刊(原表紙)「輪誦」(墨書)。(原表紙見返)「堤川郡清風面長善里張炳徳／何澹徐士嘉之論曷足為大賢之重軽哉／蝦蟇食日非日之罪」(墨書) 角筆の縦長線が、漢字句の右傍に施されている。注示符号か。

午後からは、仏書棚を調べることにし、二月に西村が見付けた⑥地藏菩薩本願經の配架してある棚を中心に三段五列ほどの仏書について点検して、西村が次の二点を見付けた。

⑩ 弥陀禮懺 上、中、下 三冊 294.356/ 157m

弘治十六年(一五〇三)跋、刊(跋文)「弘治十六年癸亥暮春上澣直旨寺老／衲燈谷学祖七十二歳書于東廟」。(後表紙見返)「主函溟禪師」(墨書) 角筆の句切線や符号が漢字に施されている。

⑪ 因明論 一冊 294.387/ Jn6

康熙五十二年(一七一三)刊(刊記)「康熙五十二年癸巳孟秋日慶尚右道山陰智異山王山寺開刊」。(表紙右下)「月詠」(墨書) 角筆の句切符・節博士が漢字に施されている。

次いで、小林は、⑥地藏菩薩本願經の角筆の書入れを調べて摘記し、節博士の他に、角筆の口訣、句切等を見出した。口訣の解説には、康副教授の教示を得た。西村は、⑩弥陀禮懺の摘記と写真撮影を行い、小林は⑦⑧⑨⑪の摘記を行ったが、他の書架の蔵書の点検にまでは及ばなかった。この日の調査には、南教授と康副教授との御世話を忝うした。

二、東国大学校中央図書館 七月四日

二日目は、李丞宰教授と尹幸舜助教授の御世話によって、調査が進捗した。先ず、東国大学校中央図書館の貴重書室での調査が許され、貴重書の数々を拝観して眼福を得ると共に、任意に取出した冊子の中から、小林が次の一点を見付けた。

⑫ 禮念彌陀懺法卷一〜卷五 一冊 貴D/217.62/℞ 7103

燕山君九年(一五〇三)刊(卷末)「公州郡反浦面鶴峰里東篤洞前住持金萬愚弟東篤寺者清信書楊荷潭」(墨書)。(表紙)「高蓮潭謹藏」(墨書) 角筆の句切線(横短線)・斜線が漢字に施されている。尚、墨書の口訣も書入れられている。

摘記は小林と西村とで行い、口訣の解説には尹助教授の教示を得た。午後からは、中央図書館二階の古書室にて調査を行った。大量の仏書の全体にわたって調べることは、限られた時間内では難しいので、法華經の冊子類を納めてある書棚の上下二段に焦点を絞って、その一冊一冊を点検した。李教授、尹助教授の協力も得た。その結果、小林が次の一点を見出した。

⑬ 科註妙法蓮華經 一冊 D213.14/冊 96

日本刊本、十七世紀刊、(表紙)「仁二」(墨書) 角筆の訓点(片仮名・平仮名)と漢字注、角筆の片仮名交り文による注解が施されている。他に、墨書の仮名、朱書の仮名と朱引も書入れられている。

西村は次の四点を見付けた。

⑭ 法華經卷第二〜卷第七 六冊 D213.14/冊 96

十七世紀刊(各冊卷末)「印教化主翰聰比丘」(墨書)

(卷二の表紙見返)「錦峯」(墨書)

角筆の句切線・合符・圈点・注示符が漢字に施されている。他に、墨書の口訣も書入れられている。

⑮法華経卷第七 一冊 十七世紀刊（後刷）

角筆の節博士が施されている。「松廣寺」寄贈

⑯法華経卷第六 一冊 D213:14/冊967

十七世紀刊（卷末）「志安比丘記付／亡母文氏／冥福」（墨書）

角筆の句切線・斜線・横線が施されている。他に、墨書の口訣も

書入れられている。「松廣寺」寄贈

⑰法華経卷第一 一冊 D213:14/冊96.7

十七世紀刊（刊記）「都大化主前屋衛掇攝普應大師運智」（表紙見返）

「坪虚」（墨書）、（卷末）「丹主坪虚」（墨書）、「比丘惠遠」（墨印）

角筆の節博士が施されている。他に、墨書の口訣も書入れられて

いる。「安佛寺」寄贈

小林は、これらの摘記を行って、角筆の線や符号の機能の認定を行った。併せて尹助教授に節博士について調査考察することを勧めた。

後日、尹助教授はこの文献の角筆による節博士を詳しく調査され、

その摘記資料を送付して来られた。

三、高麗大学校中央図書館 七月五日

高麗大学校国文科鄭光教授の肝煎りにより、南教授と尹助教授の御協力を得て、貴重書室内での調査を行うことが出来た。EVI課長始め図書館関係者に、檀国大学校と東国大学校とから見出した角筆資料の説明を南教授と尹助教授からして頂き、西村の撮ったビデオの映像も見て頂き、書庫内での調査に便宜を賜った。漢籍室の蔵書は膨大な量で総て帙に納められ整理が行届いている。夏休み中な

ので午後三時までの、実質三時間程の調査であったが、背文字の書名を手掛りにしてアトランダムに抜出し点検して、四点の角筆書入れ書を見付けることが出来た。午後になって、先ず尹助教授が、角筆で節博士を施した次の文献を、個人文庫室の中の「新菴文庫」から見付けた。

⑱禅門拈頌集卷之九 一冊 C3/A54/9

十七世紀刊（卷首）「懷印」（墨書）、（卷末）「伏願以此披閱功德／

報四重恩下濟三途苦」（墨書）「新菴文庫」（青印）角筆の節博士が施されている。他に、墨書の口訣も書入れられている。

更に、節博士と係りのありそうな書名を手掛りにしたとして、次の文献も尹助教授が見付けた。

⑲齋佛願文、至心懺悔、至心發願 一冊 C3/A56

十九世紀写（奥書）「西菴居士謹書」（墨書）角筆の縦長線が漢

字「仗」の右傍に施されている。注示符か。他に朱句切点、黒丸

句切符も加えられている。「黄棒」寄贈

西村は次の二点を見付けた。

⑳地藏菩薩本願経卷上、卷下 一冊 C3/A40

嘉慶二年（一七九七）刊（刊記）「大施主金遇海亡妻梁氏」（卷首）角筆の句切符・圈点・弧が施されている。上欄に墨書の書入れがある。

㉑芝峯類説卷第十七・卷第二十 一冊（三帙九冊の内）E1/A16/9

十七世紀刊 角筆による落書の絵が三丁表の上欄に書かれている。これらの摘記を小林が行って、角筆の線や符号の機能について認定した。尹助教授は⑳禅門拈頌集に角筆で書入れられた節博士を後日改めて調査され、その摘記資料を小林に送って下さった。

四、誠庵古書博物館 七月六日

調査四日目の二〇〇〇年七月六日は、誠庵古書博物館を訪れた。

南教授と尹助教が同道して下さり調査にも立会われた。閲覧の許可は李教授の御盡力によると聞いている。館長の趙炳舜先生は格別な好意をもって貴重書の数々を拝観調査させて下さった。日本語が達者で、何かと温かい御配慮を賜った。展示室の奥の館長室の、調査用の机の上に既に十数点の經典類が用意されてあった。その中の、白い布に包まれた十巻が初雕高麗版である。その最初に手にした一巻から、小林が、角筆で書入れた漢字を見出した。角筆スコープの照明によって浮び出た、校合用に書込んだ漢字であった。次の文献である。

②② 弥勒菩薩所問經論卷第二 一巻(卷子本)

初雕高麗版(十一世紀) 角筆の校合漢字、注音符、圈点等が施されている。

引続いて手にして調べた五点の初雕高麗版の総てから、角筆の書入れを小林は見付け、角筆使用の擴がりを感じた。五点は次の文献である。

②③ 大方等大集經卷第四十九 一巻(卷子本)

初雕高麗版(十一世紀) 角筆の句切符、斜線・横線、圈点等が施されている。

②④ 阿毘曇毘婆沙論卷第十二 一巻(卷子本)

初雕高麗版(十一世紀) 角筆の句切符、節博士、圈点等が施されている。

②⑤ 舍利弗阿毘曇論卷第一 一巻(卷子本)

初雕高麗版(十一世紀) 角筆の句切符、節博士等が施されている。

る。

②⑥ 大般若波羅蜜多經卷第二百五十五 一巻(卷子本)

初雕高麗版(十一世紀) 角筆の節博士が施されている。

②⑦ 大般若波羅蜜多經卷第三百 一帖(扇風様装)

初雕高麗版(十一世紀) 紙背に「法護」の古朱印

角筆の節博士が施され、角筆の星点に見える点もある。

十巻のうち二巻は開披が難しいので手を付けられないことにして、残りの二巻を西村が分担して調べた。

②⑧ 瑜伽師地論卷第八 一巻(卷子本)

初雕高麗版(十一世紀)

を調べた西村は、角筆による点が大量にあることを見付け、小林に示した。小林は角筆スコープで点検し、ヲコト点であることを認定し、全巻にわたって稠密に加点していること、角筆の口訣も散在することを確認した。上欄外には角筆で点図の記されていることも分かった。早速ヲコト点を帰納して点図を作る作業を行い、その過程を南教授と尹助教教授に示した。經典の漢文に対して、韓国語は日本語と同じ語順であり、機能を同じくする所があるから、日本語として解説しても通ずる面がある。星点図の主要な語は点図に帰納することが出来た。その過程で尹助教教授が対応する韓国語を教示された。中でも、星点図に日本語の助詞「に」に当るものが二箇所あり、それが韓国語で生物と無生物を区別するという示唆は有益で、用例を帰納してみると正にその通りとなり、これが韓国のヲコト点であるという自信を得た。南教授からは、口訣についての読みと意味の教示を得た。この文献は翌々日の七月八日にも再調査し、七十行程を小林が移点し、摘記した。角筆の縦長線の合符が使われ、機能の違い

によって位置を異にしていることにも気付いた。この日は李教授も来館され、フコト点の帰納と解説に立会われた。

西村が調べたもう一卷にも、次のように角筆の書入れが見付かった。

⑲阿毘曇毘婆沙論卷第十五 一卷(卷子本)

初雕高麗版(十一世紀) 角筆の節博士、圈点等が施されている。

⑳阿毘曇毘婆沙論卷第十二の僚卷。

この間に、南教授と尹助教授が、再雕高麗版等から次の四点の角筆文献を見付けた。尹助教授は、

㉑妙法蓮華経卷第一 一帖(折本装)

十五世紀後半刊 卷末に「孝寧大君補/臨瀛大君璆」以下「正板

人二/著漆人一/爐冶匠二/執鏤积七」に至る刊記がある。角筆のハングル(字音)・漢字(字音と釈義)、方便品に角筆の節博士があり、序品には墨書の口訣が書入れられている。

㉒大方広仏華嚴経卷第六十一 一帖(折本装)

再雕高麗版(乙巳歳・一二四五刊) 角筆の句切線(横短線)が施されている。

㉓大般若涅槃経卷第三十 一帖(折本装)

再雕高麗版(辛丑歳・一二四二刊) 角筆の節博士が施されている。

の三点を見出し、南教授は次の文献を見出した。

㉔大般若波羅蜜多経卷第五百三十三 一帖(折本装)

再雕高麗版(乙亥歳・一二三九刊) 角筆の節博士が施されている。

小林は、これらの摘記を行い、角筆の書入れ符号の機能について認

定した。

五、延世大学校中央図書館 七月七日

延世大学校文科大学国語国文学科林龍基教授の御高配と御世話により、延世大学校中央図書館において貴重書の数点を調査することが出来た。一点ずつ閲覧室に図書館職員が持つて来られ、その丁捲りのもと、一頁一頁を角筆スコープの光によって小林が点検し西村が補助した。南教授と尹助教授も立会われ、又、延世大学校大学院生数名も、調査状況を見学した。貴重書の選定は、南教授が墨書口訣書入れの古書を選び出納を依頼して下さった。最初に持出された漢籍の、第一頁に、角筆の口訣が書入れられているのが早速に見付かった。次掲の漢籍である。

㉕論語集註大全卷之九 一冊 刊<sup>12</sup>

十五世紀前半刊 角筆の口訣と注示符が書入れられている。他に墨書の口訣も書入れられている。

次いで、次の二点からも、角筆の口訣等が見出された。

㉖近思録 一冊 正統元年(一四三六)刊

(刊記)「正統元年六月 日印出」 角筆の口訣、注示符、節博士(?)、斜線、圈点が書入れられている。他に墨書の口訣、注示符も書入れられている。

㉗誠初心学人文 一冊 刊<sup>13</sup> 隆慶四年(一五七〇)刊

(刊記)「隆慶四年庚午暮春全羅道康津/地無為寺開刊 叔敏 元淡/供養大施主前口奉朴琳両王 宗恵」 角筆の口訣、注示符が書入れられている。他に、墨書の口訣も書入れられている。

図書館の特別の配慮により、実質三時間余の調査ではあったが、右掲の三点を見出すことが出来た。

此の日、午後四時から、延世大学校文科大學新館にて延世大学校人文學研究所と口訣学会との主催による、小林の「日本における角筆文献研究の現状と展望」と題する公開講演が催された。この講演の中で、今回の韓国調査で見付かった角筆文献について報告し、特に誠庵古書博物館から発見された初雕高麗版「瑜伽師地論卷第八」については、全巻にわたって角筆によるヲコト点と口訣が書入れられてあり、韓国でヲコト点を使った資料としても、又、現存する最古の口訣資料としても貴重であることを述べ、全巻の詳細な解明と正確な解説は南教授に期待し、小林は日本の訓点の知見等を以て協力したいと表明した(4)。

六、誠庵古書博物館(第二日目) 七月八日

初雕高麗版から角筆の書入れが見出され、ヲコト点と口訣が発見されたことにより、再度、誠庵古書博物館を訪れることになった。

此の日は、秘蔵の金剛般若波羅蜜經(七世紀末書写)一卷と、無垢淨光大陀羅尼經(新羅景德王十年・七五二刊、国宝一二六一(六)号)一卷まで拝観調査する幸いに恵まれた。その結果、(37)金剛般若波羅蜜經に角筆の補入符が用いられていることを小林が見出し、敦煌文献の十誦比丘波羅提木叉戒本(建初二年(四〇六)比丘德祐書写)一卷に角筆で施された補入符に通ずることを指摘した。又、瑜伽師地論卷第八の角筆点を再調査し、小林と西村とで初雕高麗版の角筆書入れの摘記を行い、西村は写真撮影を行った。

○帰国後の経過

小林が持参した角筆スコープを口訣学会に寄贈し引続いで調査を期待して帰国した後、誠庵古書博物館において、南教授、李教授、尹助教授により角筆のヲコト点加本を対象とする定期的な調査が

行われた(5)。又、館長の趙先生は御所蔵の古典籍について親しく鋭意調査された由にて、角筆の書入れられた文献を次々と見付け出されて、国際電話で直ちに教示され、その紙焼写真資料を次々と送って下さった。以下の通りである。

(38) 瑜伽師地論卷第五 一卷(卷子本) 初雕高麗版(十一世紀)

角筆のヲコト点・口訣等書入れ。八月初、九月十一日

(39) 妙法蓮華經卷第一 一卷(卷子本) 初雕高麗版より前の刊

角筆の節博士が書入れられている。八月二十四日

(40) 大方広仏華嚴經卷第二十二 一卷(卷子本) 十一世紀後半刊

角筆のヲコト点が全巻に施されている。八月二十七日

(41) 貞元本華嚴經卷第七「宝物」 一卷(卷子本) 十一世紀後半刊

角筆のヲコト点が施されている。九月一日

(42) 善見毘婆沙律卷第九 一卷(卷子本) 初雕高麗版(十一世紀)

角筆のヲコト点・節博士が施されている。九月九日、十日、

十一日

(43) 金光明經卷第三 一卷(卷子本) 初雕高麗版より前の刊

角筆の節博士が施されている。九月十二日、十三日

(44) 大方広仏華嚴經卷第五十七 一卷(卷子本、折本を再改装)

十一世紀後半刊 角筆のヲコト点が施されている。十月六日

一方、この間に、小林は七月の調査において摘記した資料を整理してコピーを南教授、李教授、尹助教授に送り、併せて「調査備忘」(七月二十日記)を作成してお届けし、趙館長にもお送りした。その中で、瑜伽師地論卷第八の角筆のヲコト点が複星点(6)や壺内に近接して用いるなどは日本の宝幢院点に合うこと、合符の使い分けが寛平法皇独自の合符の使い方に通ずること、節博士の加施資料が多く、中

国、日本との比較研究が望まれることなどを伝えた。

八月六日、来日された尹助教と東京にて会い、全巻の移点を終えた瑜伽師地論卷第八の全文資料を恵与された。これを検討して、返読符号(返読を受ける弧など)に気付き、前回の「備忘」を補訂した資料と共に尹助教教授に送り、趙館長にも報告した。引続いて、奈良国立博物館にて、記念レセプションに来日された趙先生にお会いし、角筆点の全巻写真作成の必要性を申し上げて撮影の快諾を頂いた。

○韓国における第二回調査

かくて、第二回目の訪韓調査を次の日程で行った。

平成十二年十一月五日(日)～十一月十二日(日) 八日間

今回は、角筆ヲコト点資料の全巻撮影と、前回調査後に見出された角筆文献の調査が主目的で、小林、西村、小林節子の他、角筆スコープ開発者の吉沢康和教授と写真技師も同行した。

今回も、新たに二点の角筆文献を教示され、小林は角筆の点・符号を確認し、摘記し、特に④⑤大方広仏華嚴経卷第六には上欄に角筆の漢字文・句による釈義が書入れられていることを見出した。

④⑤大方広仏華嚴経卷第六「国宝」 一卷(卷子本)

契丹本覆刻版(十一世紀後半) (巻頭)「海東沙門／守其藏本」

(黒印)。(巻末)「潭陽郡戸長同正田洵美亦出母利往願以成」(墨書)

角筆のヲコト点(全巻)・節博士・合符 上欄に角筆の漢字文・句による釈義が所々に書入れられている。

④⑥妙法蓮華経卷第八 一卷(卷子本) 初雕高麗版より前の刊

角筆の節博士が全巻に施されている。

前回調査後に見出された③④の角筆文献についても、原本を調査することによって、角筆の加点の内容について新たな知見を得た。

③⑧瑜伽師地論卷第五は、②⑧同卷第八の僚巻であるから、同種のヲコト点、口訣の他、返読符・合符も同様に用いられ、又、上欄に角筆の点図もあり、極一部に角筆のヲコト点の上から墨点が重ねて施されていた。④⑥大方広仏華嚴経卷第二十二と④④大方広仏華嚴経卷第五十七とは僚巻で、瑜伽師地論卷第五・卷第八とは別系統のヲコト点が共に用いられ、④④卷第五十七には、南教授の教示により漢字注音が角筆で書入れられていることを確認した。角筆の節博士、声調符も認められた。又、小林は、七月調査で見付けられた③⑨妙法蓮華経卷第一(十五世紀後半刊)折本装一帖に角筆でハングルを以て字音を書入れたものが、序品を主とし方便品には一部にあることを確認し、方便品には角筆の節博士があることを見出して、これらを摘記した。(以上、この項、小林・西村)

二、韓国で発見された角筆文献の文字・符号

韓国における第三回目の調査は、角筆点の紙焼写真を届け、写真ネガを納めることを主目的として、平成十三年四月十二日(木)～四月十五日(日)四日間の日程で、小林と小林節子が訪韓した折、趙先生と南教授・李教授の御高配と御世話により、誠庵古書博物館から新たに角筆加点の見付かった④⑦六十卷本大方広仏華嚴経卷第二十四(十世紀刊)一卷と、湖林博物館蔵の、④⑧大方広仏華嚴経卷第三十四(十一世紀後半刊)一卷、④⑨瑜伽師地論卷第三(初雕高麗版)一卷とを拝観調査する機に恵まれた。その摘録は次のようである。誠庵古書博物館の次の一点は南教授が見付けられた由である。

④⑦六十卷本大方広仏華嚴経卷第二十 一卷(卷子本)



は、その右傍に小字で補加された「如是」の二字が本文と同筆蹟であるから当時のものと見られる。最新は、⑩齋仏願文、至心懺悔、至心發願（十九世紀書写）に角筆で書入れられた縦線の注音符である。その間の世紀に刊行・書写された文献に見られるから、七世紀後半から十九世紀にわたって角筆の使われたことが推定される。

次に、角筆の書入れられた文献は、仏書と漢籍で本文が漢字文の典籍であり、その読解・誦唱等の為に、角筆で文字や符号が施されたものである。

五十点の範囲で見ると、十一世紀以前の写本・刊本には、朱・白点を見ず、墨点も殆ど無く、角筆加点が主であり、そのヲコト点が全巻にわたって加點されたものが少なくない。この事は日本の平安時代の訓点本と差異がある。このために、韓国においては十一世紀以前の文献にヲコト点等の加點のあることが、今まで気付かれなかつたと考えられる。

以下、その角筆の文字と符号について、種類別に見ることにする。

### I 角筆の文字

#### I-1 角筆の漢字

##### 〔注音〕

⑳瑜伽師地論卷第八（初雕高麗版）に、角筆の漢字を傍記して、經本文の漢字の音を注音した例がある。（ヲコト点略、以下同じ）

此中略義者謂略顯示離間意染離間未壞方便離間已

一五（角）

壞方便離間染汙心及他方便

被注字「汙」は、喉音眞韻で、玄応一切經音義に「不汙於故紆座二反字林汙穢也汙塗也」

（卷二、書陵部藏大治二年本）とある。角筆の注音「五」（韓国語ㄱ）

は同音を以て、注音したと見られる。

④大方広仏華嚴經第五十七にも、角筆の漢字を傍記して、經本文の漢字の音を注音した次の三例がある（ㄱ）。

竭貪愛水破愚癡劫（角）擗撮煩惱諸患

被注字「劫」は、牙音次清屋韻であり、新撰字鏡に「劫劫劬

二作口角反具會間音哭卵外堅皮也」（卷十一、天治本）、玄応一切經音義に「成劫又作劫同口角反具會間音哭卵外堅皮也（下略）」（卷十、書陵部藏大治三年本）とある。角筆の注音「却」は牙音次清葉韻である。

一（角）

所謂名為菩提薩埵 菩提智所生故

被注字「埵」は、舌音清果韻であり、角筆の注音「墮」も舌音果韻であるが、濁であり、清と濁との区別はせず通用させている。

「埵」は、玄応一切經音義に「塗埵都果反字 林堅土也」（卷十四、書陵部藏大治三年本）とあり、妙法蓮華經積文に「埵 慈恩云丁果丁戈二反（下略）」（醍醐寺藏本）とある。角筆の注音「墮」は、妙法蓮華經積文に「顛勝阿 羅隨 他果反（下略）」（同上本）とある。

一五（角）

所謂寂靜臥身心憍 怕故

「憍」の右傍の角筆文字は未詳である。南教授は「去」の口訣字で「去声」を意味すると解された（ㄱ）。被注字「憍」は、鬨韻去声である。下の被注字「怕」は、唇音次清陌韻であり、角筆の注音「朴」は唇音次清覺韻である。

前掲の「劫」も、次清字に対しては同じ次清字で注音している。

「埵」「墮」は被注字と注音字で清濁を通用させている。用例の数が少ないので確かではないが、注音に当り、清濁は区別しないが、

次清には次清を以てしたと見られ、清と次清とは区別していたことを反映した可能性がある。

〔39〕妙法蓮華經卷第一（十五世紀後半刊）には、角筆のハングルで注音しているが、別に角筆の漢字を以て注音した例もある。

〔加〕角  
或無價衣（十三丁裏2行目）

この一例が拾われた。

〔積義〕

〔45〕大方広仏華嚴經卷第六〔国宝〕には、角筆の漢字文や漢字（單字）を上欄の所々に書入れ注記して、經本文の当該字句の積義を示した例がある。

○（本文）佛身常顯現 法界悉充滿

〔上欄〕（青色不審紙貼付）

〔角筆〕「常出三世／顯斷二障／二障煩惱／障所知障／現常現

在前」

角筆の漢字文は、經本の「佛身常顯現」を解釈したもので、「佛は常に三世に出現している。顯とは二障を断つことであり、二障とは煩惱障と所知障とである。現とは常に現れて前に在ることである」と説いている。他にも、次のようにある。

○（上欄、角筆）

（本文）

「知身	如來甚深知	普入於法界	（此行下略）
法身	諸佛同法身	無依無差別	（同右）
智法	具足一切智	徧知一切法	（同右）
七化身	佛身及光明	色相不思議	（同右）

○（上欄、角筆）

（本文）

「此十數

智身能徧入 一切刹微塵（此行下略）

衆會」

如影現衆刹 一切如來所（同右）

○（上欄、角筆）

（本文）

「請」

世尊哀愍我等開示演說（下略）

〔30〕妙法蓮華經卷第一（十五世紀後半刊）にも、角筆によるハングルの注音と別に、

各於世界 講說正法（十丁裏1行目）

のように、釈說に係ると見られる書入れがある。

〔校異〕

〔22〕弥勒菩薩所問經論卷第二（初雕高麗版）に、經本文の校合した漢字と見られる書入れが角筆で傍書されている。

「功」

不轉功德

「功」の左傍に角筆で「・」を施し、右傍に注記している。

1—2角筆の口訣

〔28〕瑜伽師地論卷第八・〔29〕同卷第五・〔30〕同卷第三（初雕高麗版）に角筆で書入れられた口訣の十八種を、南教授が原漢字（うち二字は原漢字が未詳）と共に挙げていられる〔10〕。この口訣を原漢字との関係で見ると、漢字をそのまま用いたもの（眞仮名体）と、漢字の草体を更に略化したもの（草書略化体）と、漢字の筆面を省いたもの（省画体）とがある。この類別により、南教授の教示に基づき若干の口訣とその使用例を示す。

〔眞仮名体〕

乙 (原漢字「乙」。助詞「を」を表す)

能令衆生 染着種種妙欲塵故 (28卷第八)

攝受正法 故 (28卷第八)

い (原漢字「以」。「もつて」を表す)

為他因縁 亦能變化故 (38卷第五)

有姪欲男女展轉二交會 不淨流出 (38卷第五)

〔草書略化体〕

十 (原漢字「中」。助詞「に」を表す)

能令鄙惡名称流布十方 (28卷第八)

於一境界事 有尔所 (49卷第三)

〔省面体〕

7 (原漢字「隱」の阜偏の初画。助詞「は」を表す)

此諸 頸能殺生補特伽羅相 (28卷第八)

又雖無常法 為无常法因然與他性為因 (38卷第五)

7 (原漢字「衣」の初二画。助詞「に」を表す)

他 所化欲塵為富貴自在故 (38卷第五)

由染汙及善意識力 所引故 (49卷第三)

右は、十一世紀の加點とされる(11)口訣の例であるが、十五世紀以降の刊本にも、角筆で口訣を書入れたものがある。次の諸文献である。

⑥ 地藏菩薩本願經 (雍正八年・一七三〇刊) に、

仁者阿鐵圍之内有如是 (卷中、二丁表7行)

とある。角筆で書入れた「フ」(フ)は、原漢字「良」の草書略化体で、康副教授の教示によると、呼び掛けの「よ」を表している。

③④ 論語集註大全卷之九 (十五世紀前半刊) にも、

惜其不以一善 得名於世 (二丁表10行)

がある。角筆で書入れた「ヌ」(ヌ)は、原漢字「奴」の省面体で、「もつて」の意を表すと、南教授の教示を得た。

③⑤ 近思錄 (正統元年・一四三六刊) にも

一用於此非惟 徒廢 (卷之十三、三丁表6行)

がある。「シ」(シ)は、原漢字「沙」の省面体で、「只」の意の強調を表すと南教授から教示された。

③⑥ 誠初心学人文 (隆慶四年・一五七〇刊) にも、

其九 勿説他人過失 (十四丁表7行)

がある。「フ」は瑜伽師地論に例示した口訣である。「ヒ・」(フ)は「尼羅」の省面体で、「である」の意を表すと教示された。角筆で書かれ、墨書が重ね書している。

遡って、李田京氏から教示された③⑦妙法蓮華經卷第一 (角筆点は十二世紀以前とされる) (12) にも、李氏の摘記によると、

阿脩羅衆中而宣此 言如来

がある。角筆の「リ」は、亦(リ)の省面体であり、助詞「が」(日本の古代語の「い」に当る)を表す。この口訣は、瑜伽師地論(初雕高麗版)にも、

不寂靜行 相續而轉 (28) 卷第八) のように用いられている。

I-3 角筆のハングル

ハングルを、角筆で書入れた文献も見出された。李朝世宗二十八年(二四四六)にハングルが公布された以後の書入れになるのは言うまでもない。(30) 妙法蓮華經卷第一(十五世紀後半刊)(13)には、序品第一の全品と、方便品第二の末尾の一部とに、角筆でハングルが二十数箇所書入れられている。角筆のハングルは、經本文の漢字の字音を注音するのに用いられている。以下のようなのである。

受報好醜 於此悉見 / 演說經典微妙第一 (序品、十丁表3~4行)

出柔輒音 (序品、十丁表5行)

碑磔碼磔 金剛諸珍 (序品、十二丁表4行)

往詣佛所 (序品、十二丁裏5行)

而擊法鼓 (中略) 寂然冥然 (序品、十二丁裏3行)

往忍辱力 (序品、十三丁表2行)

及癡眷屬 (序品、十三丁表4行)

香華 伎樂常以供養 (序品、十四丁裏3行)

嚴飾塔廟 (序品、十四丁裏4行)

其華開敷 (序品、十四丁裏5行) (角筆の上に墨書口訣を重ねる)

其語巧妙純 一無雜 (序品、十六丁裏4行)

為求辟支佛者 (序品、十七丁表1行)

安慰 無量衆 (序品、二十五丁裏3行)

汝等勿憂怖 (序品、二十五丁裏4行) (角筆の上に墨書口訣を重ねる)

相繼得成佛 (序品、二十六丁裏2行)

多遊 族姓家 棄捨所習誦 (序品、二十七丁表1行)

倍復加精進 (序品、二十七丁表3行) (「倍」に角筆の節博士あり)

癡忘不通利 (序品、二十七丁表2行)

碼磔 玫瑰瑠璃珠 (方便品、五十丁裏1行)

「対」(角)  
「瓦」(角)  
「泥」(角)  
「土」(角)  
等(方便品、五十一丁裏3行)

角筆のハングルの他に、墨書の口訣も書入れられている。この墨書の口訣は、南教授の教示によると、十五世紀後半か十六世紀初の書入れという。墨書の口訣は、角筆のハングルが書かれた上に重ね書した所があるから、角筆のハングルが書かれたのは、それ以前となる。さすれば、仏典の妙法蓮華経の説誦音を通して、当時の朝鮮漢字音を知る具体的な資料となる。特に角筆で表された文字には、墨書の文字よりも早く音変化が現れることが、日本の角筆文献には指摘されている(14)。角筆の文字が凹みで書かれるために表記規範に必ずしも拘束されないからである。このことにも配慮して、角筆のハングルを朝鮮漢字音史の資料として扱う必要がある。

## II 角筆の符号

角筆で書入れられた符号には、〔1〕ヲコト点、〔2〕返読符、〔3〕句切符、〔4〕合符、〔5〕声調符、〔6〕節博士、及び〔7〕注示符が見出された。

## II-1 角筆のヲコト点

角筆で施されたヲコト点には、異なる複数の系統が認められる。ここでは、先ず、角筆のヲコト点が全巻にわたって施され、且つ、移点資料(15)と写真とで検証することの出来る、瑜伽師地論(初雕高麗版)のヲコト点(A種とする)と、大方広仏華嚴経(新訳)(十一世紀後半刊)のヲコト点(B種とする)とを取上げる。

A種 ②③ 瑜伽師地論卷第八 誠庵古書博物館蔵

③④ 瑜伽師地論卷第五 同右蔵

④⑨ 瑜伽師地論卷第三 湖林博物館蔵

B種 ④⑩ 大方広仏華嚴経卷第二十二 誠庵古書博物館蔵

④④ 大方広仏華嚴経卷第五十七 同右蔵

④⑤ 大方広仏華嚴経卷第六「国宝」 同右蔵

④⑧ 大方広仏華嚴経卷第三十四 湖林博物館蔵

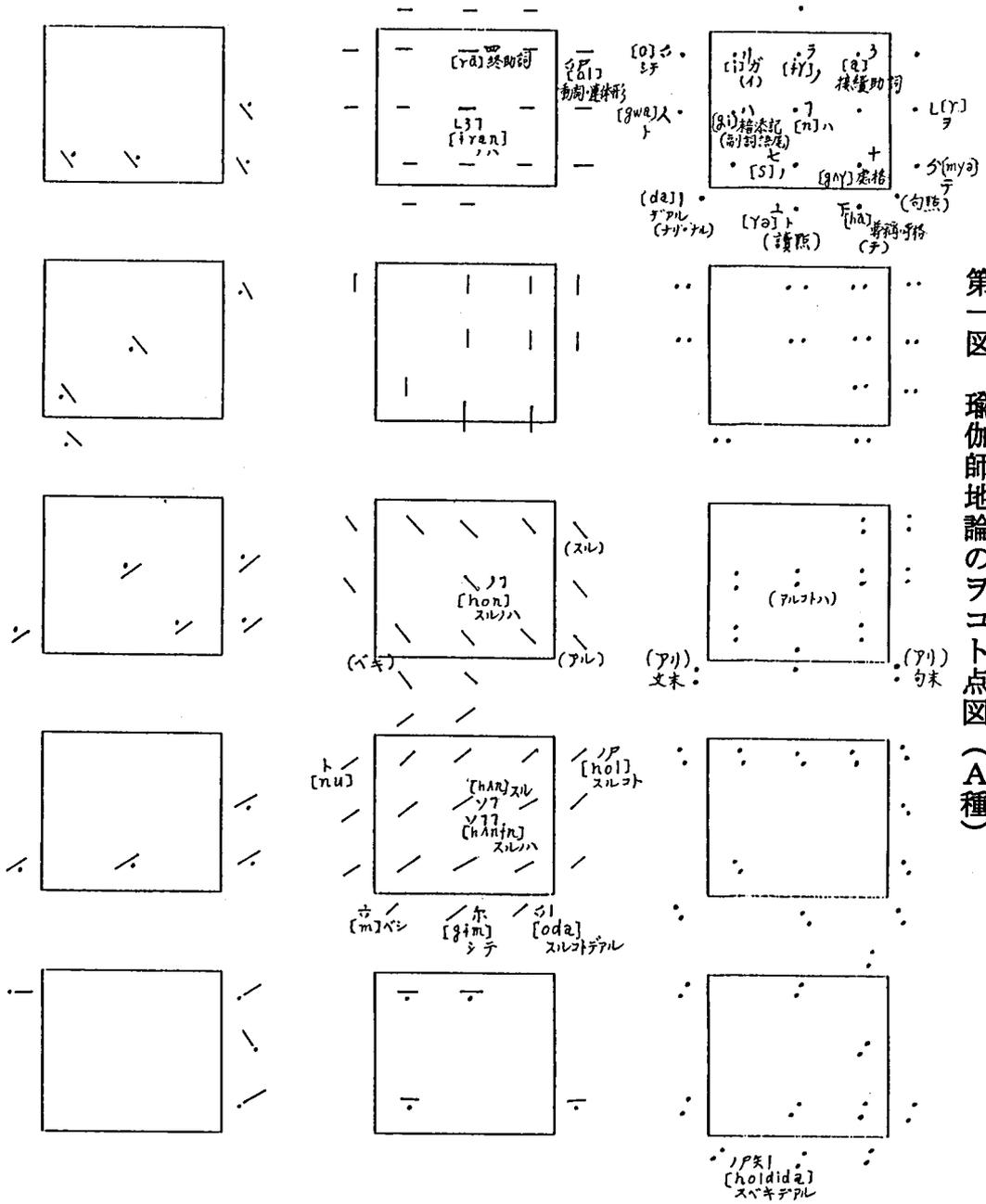
B種には、他に、⑤ 大方広仏華嚴経卷第三十六(誠庵古書博物館蔵)があるが、筆者未見である。

②③④⑨の瑜伽師地論は、三本ともヲコト点は同一形式であり、第一図のように帰納せられる。これに対して、④⑩④④④⑤④⑧の大方広仏華嚴経は、四本ともヲコト点が同一形式で、第二図のように帰納せられるが、瑜伽師地論のヲコト点とは異なっている。相異なる二つの系統のヲコト点の使われたことが知られる。

第一図、第二図とも、ヲコト点は南教授が解説された所に依拠している(16)。各ヲコト点に付された口訣がこれである。その音「」内のローマ字)と日本語訳(片仮名と文法機能注記)は尹助教授の教示に依っている。このうち、「ガ」(「ガ」)「テアル」(「テアル」)のように、卑見を( )に入れて添えた所がある(17)。又、新たに卑見を( )で加えた所もある(18)。ヲコト点の壺の配列の順序も、卑見により、星点「・」の次に、複星点「:」「:」「:」「:」を配し、その次に短線「|」「|」「|」「|」を置き、その後短線と点を組合せた「|:」「|:」「|:」「|:」「|:」「|:」を配する(19)ことにした。

この第一図の瑜伽師地論のヲコト点図(A種)と第二図の大方広仏華嚴経のヲコト点図(B種)とから、次の諸事項が知られる。

一、韓国において、經典の漢文を釈読するに当り、ヲコト点が曾て使われた。そのヲコト点は、漢文では表されていない助辞類や





文法機能などを朝鮮語で表している。例えば、生物に付く助詞「ノ」(ㄴ)〔E〕と、無生物に付く助詞「ノ」(ㄷ)〔E〕とを位置(A種)又は位置と符号(B種)の違いによって区別している。

二、A種とB種とは、ヲコト点の形式を異にしている。韓国において、複数の異なった系統<sup>(20)</sup>のヲコト点の存在したことが考えられる。

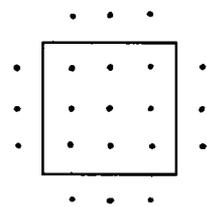
三、A種もB種も、前述のように、星点「・」の次に、星点を二つ並べた複星点が多く用いられている。「.:」:「.:」だけでなく、「.:」:「.:」も多用されている。

四、短線の形態は、瑜伽師地論(A種)で見ると、複星点を先ず打ちこれを繋いで線にした形の「:」:「:」:「:」が少なからず存する。中には、下辺中の「:」と「.:」のように、同一の機能を示すものもある<sup>(21)</sup>。これは、複星点の二点を繋いで短線の符号を作り加えたことを考えさせる。

五、点と線とだけでは符号の形が不足する場合は、点と短線とを組合せた「.:」:「.:」:「.:」:「.:」:「.:」:「.:」:「.:」:「.:」等を用い加えている。日本のヲコト点図に用いられる鉤「:」:「:」や、丸「○」や、弧「(」)「)」や、「+」等の符号は、十一世紀の瑜伽師地論(A種)と大方広仏華嚴經(B種)には見られない<sup>(22)</sup>。

六、ヲコト点図の符号の構成の仕方としては、星点「・」を基本とし、これを二つ並べた複星点を作り、複星点を繋いで短線を作り、更に点と短線を組合せて変形した符号を作り出して用いたと考えられる。

七、ヲコト点を施す位置は、漢字の字面の四隅・四辺ではなくて、四隅・四辺の内側や外側である。星点図で示すと、

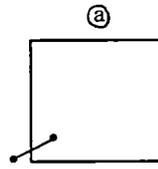


のようである。星点だけでなく、他の複星点や短線や点と線の組合せの符号も同様である<sup>(23)</sup>。但し、実際の加点に当っては位置のずれた場合もあり、四隅・四辺に懸る場合も見られるが、それは、右掲の位置が実際の加点に当ってずれたバリエーションと考えられる。

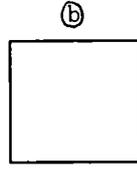
日本のヲコト点は、漢字面の四隅や四辺の上に施されるのが一般である。但し、宝幢院点の星点図は四隅・四辺の内側にも施されるが、宝幢院点が複星点の特に「.:」:「.:」をも用いることと併せて、韓国のヲコト点と宝幢院点の関連を考えさせるものである<sup>(24)</sup>。日本のヲコト点が漢字面の四隅・四辺に施されるのに対して、韓国のヲコト点が漢字面の四隅・四辺の内側や外側に施されるのは、用具と関連があると考えられる。即ち、日本のヲコト点が毛筆による白点や朱点を施すのに対して、右掲の韓国のヲコト点は、角筆による細小の点や短線で施されている。毛筆による加点では、漢字(特に画数の少ない漢字を例として見ると分り易い)を、右掲の星点図のように二十一区分して使い分けることは困難であろう。韓国でも、墨書で十四世紀に施された「法華經卷第七」では、南教授の解説された点図によると<sup>(25)</sup>、星点・複星点・短線等が

総て、漢字面の四辺の外側にだけ施されていて、内側に施されていないのが参考になる。

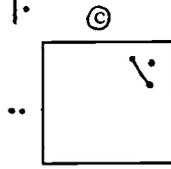
八、角筆で書いた点図が、上欄外に、A種の瑜伽師地論にも、B種の大方広仏華嚴經にも、記入されている。



③ 瑜伽師地論卷第八、第十張、上欄  
(角筆の凹みの上を、墨筆で重ね書)



② 瑜伽師地論卷第五、第五張、上欄  
(角筆の凹みのみで、墨筆の重ね書はない)



① 大方広仏華嚴經卷第三十四、第十張、上欄  
(角筆の凹みのみで、墨筆の重ね書はない)

③は、本文「容可出離」の「離」(口角)に対する別のヲコト点法を示し、②は本文「名為常樂」の「樂」(加点なし)に対する加点了り、①は本文「何況資財」の「財」(口角)に対する別のヲコト点法を示している。これは、同じ本文に対して、異なる

積説があり、それを異なるヲコト点法で示したと見られる(26)。右掲の二〜八の事項は、瑜伽師地論(A種)と大方広仏華嚴經(B種)に基づいたものであるが、韓国において、他の異なったヲコト

点が少なくとも三種は知られる。第一は、先掲の②妙法蓮華經卷第

(十二世紀以前)であり、第二は、右に言及した墨書加点的法華經卷第七(十四世紀)であり(27)、第三は、④善見毘婆沙律卷第九(初雕高麗版、誠庵古書博物館蔵)の角筆で施されたヲコト点である。第三の善見毘婆沙律卷第九は、ヲコト点が全巻には施されず、散在するものであるが、そのヲコト点法は又別種である(28)。

これらも亦、ヲコト点を施す位置が四隅・四辺でなくその内側や外側であること、複星点を用いることにおいて、共通している。

更に、多種のヲコト点資料の見出されることが期待される。

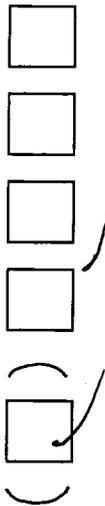
## II-2 角筆の返読符

角筆で書入れられた返読符が、先ず、十一世紀の瑜伽師地論の②卷第八・③卷第五・④卷第三と、大方広仏華嚴經の④卷第二十二・④卷第五十七・⑤卷第六・⑥卷第三十四とに見られる。符号には、次の「1」〜「6」が認められる。

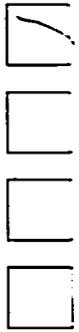
「1」返読する最初の漢字の左下隅から起筆して、字の左傍にわたって長く施す。字の左傍から起筆することもある。



「2」返読する最初の漢字の右肩又は字の右傍から起筆して長く施す。



「3」返読を受ける漢字にだけ弧(漢字面上から「」)を書くを施す。



「4」返読を受ける漢字二字にそれぞれ弧「 $\curvearrowright$ 」を施して二度返読することを示す。αからβに返読する場合と、αから下の漢字に続き、そこからβに返読する場合とがある。



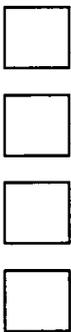
「5」二字熟字の合符と返読とを兼用する弧を施す。



「6」返読する最初の漢字の左傍下寄りに星点「・」を施す。



次に、十八世紀の⑥地藏菩薩本願經（雍正八年・一七三〇刊）では、角筆の星点を、返読する最初の漢字の左下に施している。



以下、各符号について例示する。

「1」と「2」とは、瑜伽師地論にも大方広仏華嚴經にも用いられ

ているが、散在する程度であり、使用例は少ない。「1」の例は次のようである。

樹等外物亦有生命（瑜伽師地論卷第八）

由彼諸天為自己故（瑜伽師地論卷第五）

化為欲塵非為他（瑜伽師地論卷第五）

昔有如來無礙月（大方広仏華嚴經卷第二十二）

一切法平等為所住處得授記別故（同卷第五十七）

大方広仏華嚴經は、瑜伽師地論よりも例が少なく、起筆位置が漢字の左下のやや内寄りである。

「2」の例は、次のようである。

復次白品一切翻前（瑜伽師地論卷第八）

無有便穢（瑜伽師地論卷第五）

正行清淨盡書行故（瑜伽師地論卷第八）

觀衆生心無所著（大方広仏華嚴經卷第二十二）

業行所成現於世間（同卷第二十二）

未涅槃者令得涅槃（大方広仏華嚴經卷第五十七）

「3」「4」「5」の、弧を返読に用いるのは、瑜伽師地論に見られ

る。「3」の返読を受ける漢字に弧を施すのは次のようである。

於他攝物起盜欲樂 (瑜伽師地論卷第八)

此二摠顯他信清淨 (瑜伽師地論卷第八)

若男於女不起女欲 (瑜伽師地論卷第五)

由彼諸天為自己故 (瑜伽師地論卷第五)

「4」の返読を受ける漢字二字にそれぞれ弧を施して二度返読することを示すのは、次のようである。

立如是論者此顯授他當所說義 (瑜伽師地論卷第八)

不以餘手觸等方便而出不淨故 (瑜伽師地論卷第八)

由他所害不由自害 (瑜伽師地論卷第五)

不能斷後世大苦者 (瑜伽師地論卷第五)

「5」の熟字の合符と返読とを兼用する弧を施すのは次のような例である。他の例は合符の項に挙げる。

由隨學不善大夫邪教故 (瑜伽師地論卷第八)

瑜伽師地論では、「3」「4」「5」の弧を返読に用いることが多く見られる。但し、返読する箇所常に常に施されるわけではなく、必要に応じて施されている。

「6」の、返読する最初の漢字の左傍下寄りに星点「・」を施すの

は、大方広仏華嚴經に見られる。

百萬億寶門垂布瓔珞百萬億金鈴出妙音聲

(大方広仏華嚴經卷第二十二)

以妙音聲演無量法隨衆生意悉令滿足

(同卷第二十二)

知諸衆生死此生彼故 (大方広仏華嚴經卷第五十七)

龍王奮迅興大法密雲耀解脫電光震如實義雷

(同卷第五十七)

角筆の星点「・」を、返読する最初の漢字の左下に施すのは⑥地藏菩薩本願經(二七三〇刊)に、次のように見られる。

諸衆生等伊臨命終日得聞一仏名一菩薩名

(卷中、十四丁裏5行)

## II-3 角筆の句切符

角筆で書入れた句切符には、(i)星点「・」によるもの、(ii)横線によるもの、(iii)「<」「>」符によるもの、がある。

(i)角筆の星点「・」による句切

まず、十一世紀の瑜伽師地論の②卷第八・③卷第五・④卷第三と、大方広仏華嚴經の⑩卷第二十二・⑪卷第五十七・⑫卷第六・⑬卷第三十四とでは、句切を示すのに、角筆の星点「・」を用い、共に施す位置の違いで句点と読点とを区別して使い分けている。

その句点と読点とが、瑜伽師地論と大方広仏華嚴經とで異なっている。即ち、瑜伽師地論では、ヨコト点図の第一図に示したように、漢字の右下隅の外側で筆画に接近した箇所に「・」を施して句点(文末)とし、漢字の下中辺の外側に「・」を施して読点(文節末)と

している。

〔句点〕

復次諸邪見者（マゴ）者此是摠句。（瑜伽師地論卷第八）

諸有情若男於女不起女欲。若女於男不起男欲。（同卷第五）

但し、副詞「能」にも次のように同じ点が施されている。

此中能。和合苦故名。為結。（瑜伽師地論卷第八）

副詞「能」は「能<sub>ナ</sub>」として用いられ、「<sub>ナ</sub>」のヲコト点が近接した位置にあるので、移点における誤点の可能性がある（29）。

〔読点〕

三種守護一尊重・至親・眷屬・自己・之所守護二王・執理

家・之所守護（瑜伽師地論卷第八）

於邪舉罪時・有五種（同卷第八）

二菩提資糧・到彼岸・方便（瑜伽師地論卷第五）

これに対して、大方広仏華嚴經では、ヲコト点図の第二図に示したように、漢字の左下隅の外側で筆面に接近した箇所に「・」を施して句点（文末）とし（30）、漢字の下中辺の外側に「・」を施して読点（文節末）としている。

〔句点〕

為欲調伏諸衆生故。開示如來大威徳故。（大方広仏華嚴經卷第一）

二十二

菩薩集助道徧一切衆生一切刹一切世一切劫亦無量（大方広仏華

嚴經卷第五十七）

〔読点〕

爾時・如來大悲普覆示一切智所有莊嚴（大方広仏華嚴經卷第二十二）

如是儀則・如是信樂（大方広仏華嚴經卷第二十二）

一切過失皆永離・故（大方広仏華嚴經卷第五十七）

不退轉心乃至菩提・終不息故（大方広仏華嚴經卷第五十七）

次に、十八世紀の⑥地藏菩薩本願經（一七三〇刊）では、角筆の星点を、漢字の右下に施して句点、中下に施して読点として、次のように用いている。

〔句点〕永不復見（卷中、十九丁裏4行）

〔読点〕閻浮衆生伊於此・大士（有大因縁（卷中、十一丁表6行）

（ii）角筆の横線による句切

先ず、十一世紀の瑜伽師地論と大方広仏華嚴經に、角筆で、漢字の横幅と同じ長さの横線を施した例が、少数であるが見られる。

或撥作用壞（眞實事（一唯用（分別染汗慧為體（瑜伽師地論卷第八）

然成變異一方能為因一非未變異（同卷第五）

離幻偽一腹性質直故（大方広仏華嚴經卷第五十七）

第三例で言えば「偽腹」のように読まず下の字に続かないことを示す用法と見られる。

次に、角筆で横短線を漢字の右下や中下に施して句切を示す例が、十三世紀・十六世紀に見られる。

十三世紀の再雕高麗版の③大方広華嚴經卷第六十一（二二四五刊）では、漢字の右下に、角筆で横短線を施している。

如是一切諸国土中（四丁裏3行）

菩薩大衆前後圍遶二諸世間主而（四丁裏5行）

睽羅伽人非人等諸宮殿中或在人間村邑（五丁表3行）

在於種種大衆會中種種言辭說種種法如此會中（五丁裏1行）

文中にも文末にも用いられている。

十六世紀の④禮念彌陀道場懺法（二五〇二刊）では、漢字の中下に、角筆で横短線を施している。（墨書口訣略）

各各示現廣長舌相一遍覆三千大千世界周匝圍遶說誠諦言一汝等有情（三丁表5〜6行）

稱佛名号分明不乱（四丁表5行）

文中の用法の例が拾われた。

（iii）角筆の符号「く」「>」による句切

先ず、十一世紀の初雕高麗版に次のように用いられている。

②4阿毘曇毘婆沙論卷第十二

（角）

有説者本く得自在隨意

性見苦見集所断一切遍使有使>性餘使無使性伴性見道所断亦

如是

（角）

②5舍利弗阿毘曇論卷第一

觀／見慧解脫、悔不悔悅喜心

④1貞元本華嚴經卷第七

於然燈仏／所親近承事>修行梵行恭敬供養聞法

（角）

次に、十八世紀刊の次の二文献にも角筆で施されている。

①因明論（康熙五十二年・一七一三刊）

（角）

是無常有質礙故く故曰有俱不／成（二十五丁裏2行）

鹿林斯風扇矣

（角）

第二例の「矣」の右傍に角筆で書入れられた「く」は口訣か。

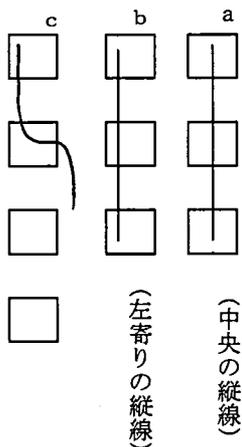
②地藏菩薩本願經卷上、卷下（嘉慶二年・一七九七刊）

仏>告普廣<sup>為會</sup>代此經伊（下略）（卷上、十一丁裏8行）

（角）

II-4 角筆の合符

合符は、漢字二字又は三字以上が一つの概念又は一つの意味上の纏りを表すことを示す符号である。日本の訓点では漢字と漢字との間に縦短線を施すのが一般であるが、初雕高麗版の瑜伽師地論と大方広華嚴經に角筆で施された合符は、次掲のように、当該漢字の二字又は三字以上の全字の字面上に縦長線を施している。その位置と形によつて次の三種が認められる。



（中央の縦線）

（左寄りの縦線）

先ず、瑜伽師地論の用例を掲げる。大方広華嚴經に比べて多く見られるからである。

aの例

①名可楽語於現在世事（卷第八）

平如是論者此顯授他當所說義 (卷第八)

妄語中可信者 (卷第八)

鄙惠名稱流布十方 (卷第八)

像盜 (卷第八)

生希望者謂劫盜 (卷第八)

由獲得自生和合 (卷第五)

△又說有三種樂 (卷第五)

②自然不寂靜 (卷第八)

文句可味故名美妙 (卷第八)

bの例

能令入衆不得无畏悚懼无威 (卷第八)

必相称相順方能為因 (卷第五)

名非鄙愛願受持梵行故 (卷第八)

cの例

觀執五種取蘊 (卷第八)

謂由親近不善丈夫 (卷第八)

二由障寺善故 (卷第八)

能令退失諸勝善法 (卷第八)

諸句顯未加行殺害 (卷第八)

謂欲損惱其身 (卷第八)

謂由三種意染非撥施故 (卷第八)

謂顯未誹謗若因若果若流轉緣若流轉士夫 (卷第八)

名非鄙愛願受持梵行故 (卷第八)

能引發後世聖非聖財 (卷第五)

受用正法則不如是 (卷第五)

又三洲人攝受妻妾施設嫁娶 (卷第五)

一切有情无攝受妻妾 (卷第五)

問何故建立三種欲生三種樂生耶 (卷第五)

要由獲得自生和合故 (卷第五)

一受學增上戒二受學增上心 (卷第五)

aの①は、体言又は体言句であり、aの②は、形状言である。これ  
に対して、bは、用言であり、cは、返読符の項に掲げたように、  
熟字と返読とを兼用した符号であるが、その熟字は、返読を受ける

ことから分るように、用言である。その合符の位置は、bの用言と同じく左寄り(31)である。

これによると、合符を施す位置をaのように、中央にするか、bとcのように左寄りにするかは、意図的に区別したと見られる。例外は、a①の△印の一例である(32)。さすれば、合符の位置を異にすることによって用法の違いを示すという機能分化が行われたこと(33)を示すと見られ、特にaの中央縦線は、体言(①)と形状言(②)を表し、bとcとの左寄り縦線は、用言を表したことになる。日本の古訓点でも、中央縦短線が体言・形状言を表し、左寄り縦短線が用言(サ変動詞)を表すことは、十世紀の寛平法皇の加点本に見られる(34)。

次に、大方広仏華嚴經にも、例が少ないながら、次のように、使い分けが見られる。

a① 念持清淨淨行 (49)大方広仏華嚴經卷第三十四)

a② 解清淨故 (同卷第三十四)

b 殊勝大願悉成滿故 (44)大方広仏華嚴經卷第五十七)

④4 大方広仏華嚴經卷第五十七には、他に、熟字の右傍に弧を施した次の例が、少ないながら見られる。

亦無際如劫數說不可盡菩薩集助道

如衆生語言法無量菩薩集助道

諸三昧亦不因此而受彼生

不由他教得無礙辯

「助道」のような熟字にも、「彼生」「他教」のような別語の熟合にも用いている。このような、弧を熟字の右傍に角筆で施して熟合を示すことは、敦煌文献の「観音經」(S. 5556)の「天龍夜叉」にも見

られる(35)。

II—5 角筆の声調符

角筆で書入れた圏点又は半円形「ㇿ」の点が、次の文献から拾われた。

④3 金光明經卷第三

(ア) 時父長者即。以偈頌

大菩薩等亦。悉擁護

(イ) 二二。現時神

(ウ) 黃頭。大神

三月是。春

圏点は大き目の丸であり、時に半円形「ㇿ」とも書かれる。これを声調符と見ると、(ア)は入声、(イ)は去声、(ウ)は平声に当り、それぞれの漢字音に合う。この④3金光明經卷第三には、後述のように節博士と見られる符号も角筆で施されている。本文の字体は十世紀の写経体に通ずるが、角筆の加点時期は特定し得ない。

④2 善見毘婆沙律卷第九 初雕高麗版(十一世紀)

不如偷蘭遮園。

圏点は平声に合う。

④4 大方広仏華嚴經卷第五十七

(ア) 安住此法則得。如来

修行無失。

一切衆生樂。發菩提心

(イ) 滴其。意故

(ウ) 隨衆生欲令歡。喜

仏子菩<sup>(角)</sup> 薩摩訶薩有十種坐

神足通隨<sup>(角)</sup> 所応化

(エ) 明淨意客塵不能染着故

師子坐能說法<sup>(角)</sup> 故

(オ) 不壞真如實際<sup>(角)</sup>

(ア)は入声、(イ)は去声、(ウ)は平声、(エ)は上声の位置に角筆の符号が差されていて、声調符と見ると、それぞれの漢字音に合う。但し(オ)は平声の位置にあるが漢字音は去声である。符号の形は、

半円形で大きい「ㄷ」「ㄷ」を主としている。この④大方広仏華嚴經卷第五十七には、前述のようにヲコト点も加点されている。角筆のヲコト点は細小で浅い凹みであるが、声調符の凹みは太めであつて、別筆の可能性がある。

声点に半円形の「ㄷ」を使用することは、誠庵古書博物館蔵の高麗時代版「金剛般若經」(豆本)に、「以三十二相見如来不。」のよ

うに附刻されているから<sup>(36)</sup>、高麗時代でも行われたことが分る。この半円形の声点が中国大陸で使われた符号であることは、宋版法藏和尚伝(高山寺蔵)の朱書の声点に見られ、南宋の「嘉禾比丘行忠」の手に成ることに基づいて説いた所である<sup>(37)</sup>。

角筆を以て圈点を施すことは、韓国の十六世紀以降の刊本の中にも見られるが、採取例が少ないために、声点としての検討が出来ていない。

いずれにせよ、角筆を以て声調符を施した資料が存するならば、同種の資料を更に広く蒐集することによって、ハンブル公布より前の高麗時代における、朝鮮漢字音の新資料が得られることになるで

あろう。

II-6 角筆の節博士

角筆で書入れた節博士は、先ず、④大方広仏華嚴經に、次の諸用例が拾われる。

(ア) 若垢若淨時與非時方便

菩薩器仗断除一切分別故

諸仏功德 勤加精進令速円満

(イ) 謂隨順善友是出生仏

所住处何等為十

(ウ) 不虛假腹無險諛故

被波羅蜜甲度脱一切諸含識故

菩薩摩訶薩有十種大丈夫名号

一向正念無異攀縁巧知三昧

(エ) 得如来一切智無上善巧修

右掲の(ア)(イ)(ウ)(エ)は、日本古点本の節博士に当り、後世云う「ソリ反」「ヲル下」「ユリ搖」「スグ」に形が通ずる。(ア)は「ソリ反」に通じ、当該漢字の右肩から起筆している。(イ)は「ヲル下」に通じ、当該漢字の左肩から起筆する。第二例は「等」の左肩から起筆した線の他に、左傍中程から起筆した線もある。(ウ)は

「ユリ搖」に通じ、当該漢字の右肩から起筆するもの他、右傍中程や右下から起筆するものもある。(エ)は「スグ」に通じ、当該漢字の左傍に施されている。

これと同じ形のは、日本の古博士加點資料に見られ、又、十世紀書写の敦煌文獻「觀音經」(S.5556)の角筆で書入れた節博士にも見られる(38)。

同種の節博士は、僚卷の(45)大方広華嚴經卷第六にも見られる。又、初雕高麗版の、(42)善見毘婆沙律卷第九、(24)阿毘曇毘婆沙論卷第十二、(29)阿毘曇毘婆沙論卷第十五、(25)舍利弗阿毘曇論卷第一、及び(26)大般若波羅蜜多經卷第三百五十五、(27)大般若波羅蜜多經卷第三百にも見られる。

これらの初雕高麗版に角筆で施された節博士は、經本文の特定の字に單発的に加えられ、全卷を通して散在する程度であるが、再雕高麗版になると、一行中の各字にそれぞれ節博士を加えたものが見られる。(32)大般涅槃經卷第三十(辛丑歳・一二四一刊記)では、

例えば、「所謂水火如是比丘則能莊嚴」(三十八丁裏6行)の「水」から「能」までの各字の右傍に加えられ、(33)大般若波羅蜜多經卷第五百三十三(己亥歳・一二三九刊記)では、例えば、「時毘沙門天告摩尼跋陀大将而作是言如来今欲詣彼塚間郷可速往」(十九丁裏3、4行)の「〇」印の字のそれぞれ左傍に加えられている(39)。

次に、十八世紀の順読口訣の刊本にも、次のように、角筆で節博士が書入れられている。

⑥地蔵菩薩本願經(雍正八年・一七三〇刊)

(ア)利益衆生(上、二十二丁表3行)

惟願世尊伊為未來世末法衆生會  
(中、四丁表8行)

及大誓願力(中、十一丁裏4行)

無相如来午劫名安樂午(中、二十二丁表5行)

欲修無上菩薩者(下、十二丁表6行)

吾觀地蔵威神力尼平(下、十四丁裏9行)

人乙不問善惡(中、二十二丁裏4行)

若非如来大慈力故面(上、十六丁裏8行)

破煩惱賊(上、二十四丁裏9行)

(イ)所有功德果及不思議議威神之力乙

(下、八丁裏5行)

若未來世曳有善男子善女人伊

(下、十二丁表4行)

於仏法中厓二念恭敬面(下、十八丁裏4行)

在閻浮提也(中、二十丁表1行)

又閻浮提臨命終(中、二十一丁裏4行)

惡毒者為也入ア(上、二十三丁裏2行)

(ウ) 惟願世尊 伊為未來世末法衆生為

(中、四丁表8行)

命終人 伊在世厓未曾有少善根也

(中、十三丁裏7行)

本業也 自受惡趣 (中、十三丁裏8行)

利益人天無量事尼 (下、十五丁表1行)

欲入山林那及渡海口齊 (下、十六丁表7行)

在閻浮提也 或利益人也 或損害人也

(中、二十丁表1行)

(エ) 號一切智成就如来 (上、十七丁裏7行)

略説地藏 (中、五丁表3行)

唯然世尊 (中、五丁表5行)

(オ) 悉下長釘爾 拔舌耕犁爾 (上、十五丁表9行)

即解脱菩薩 伊是五光目者

(上、二十一丁表4行)

復銅爪 伊抽腸剝斬爾 (上、十五丁表5行)

右掲の(ア)は、「ソリ反」、(イ)は「ラル下」、(ウ)は「ユリ搖」、(エ)は「スグ」の形にそれぞれ通ずる。但し、(オ)の符号については未詳である。

このような節博士は、①因明論(康熙五十二年・一七一三刊)にも見られる、又、刊年未詳であるが、十七世紀刊と見られる、②法華經卷第七(「松廣寺」寄贈本)、③禪門拈頌集卷之九にも節博士が角筆で書入れられている。④法華經卷第一(「安佛寺」寄贈本)では、角筆の節博士が變形して、次例のように長くなり複雑になっている。

須菩提等 (三十一丁表3行)

今昔之事 宛然相契 則將 (三十一丁表9行)

滅等者意在冥叙一經 契後文(三十一丁裏2行)

時代による符号の変化を示すものであろう。

右に掲げた節博士は、經本文の行間を使って、当該字の右傍又は左傍に、所定の諸符号を書入れたものである。これとは別に、經本文の幾つかの行にわたって、当該字の四隅のいずれかから起筆して、右方向に横長の波線を書入れたものがある。初雕高麗版より前の刊の、③妙法蓮華經卷第一、④妙法蓮華經卷第八(③と儼卷)、④金光明經卷第三には、全卷にわたって見られる。

誠庵古書博物館の趙炳舜館長から、妙法蓮華經卷第一(③)に横長の波線のあることの連絡を受け、ファックスと続いてカラー写真で送付された資料を見た時は、紙の皺かと疑ったが、第二回目の調査で、原本に当って観た所では、角筆による意図的な書入れのように見られる。それは、波線の起筆位置が、いずれも当該漢字の四隅又は字面周辺のいずれかにあることと、仔細に見ると、波線の波は

微妙な起伏を持ち且つ所々で切れ続きを持っていることによつて  
いる。韓国の声明研究家で且つ実演者の、法頭教授（東国大学校）  
は、これを節博士と認定され、原本に角筆で施されたこの横長の波  
線に沿つて、当時の声明音の復元を試みられた。

③⑨ 妙法蓮華經卷第一の角筆による横長の波線は、次のようである。

解之法我自昔來未嘗從佛聞如是說今者

四衆咸皆有疑唯願世尊敷演斯事世尊何

故慙勤稱歎甚深微妙難解之法 尔時舍利

弗敢重宣此義而說偈言

慧日大聖尊久乃說是法自說得如是 力無畏三昧

禪定解脫等不可思議法道場得法 無能發問者

僚卷の④⑥妙法蓮華經卷第八は、首欠で「陀羅尼品第二十六」以降を  
存するが、現存の全巻にわたつて巻第一と同様な横長の波線が施さ  
れている。起伏を持つ波線は、長いものが一二・三纏で五行にわた  
っている。

④③ 金光明經卷第三も、巻首を欠き「三十三天各以已得」以下巻末  
までを存し、全巻にわたつて妙法蓮華經卷第一（④⑨）・巻第八（④⑥）  
と同様な横長の波線が施されている。波線の長さは、九・〇纏、一  
四・三纏等様々で、長い線は一七・〇纏で八行にわたっている。こ  
の金光明經卷第三には、前述のように角筆の声点も施されている。  
角筆の横長の波線はこの声点と同筆と見られる凹みを示しているか  
ら、声明譜と共に声点も書入れた可能性がある。

十五世紀後半に刊行された、④⑩妙法蓮華經卷第一にも、次のよう

に角筆による波線が施されている。

四衆咸皆有疑。惟願世尊。敷演斯事。世尊何

故殷勤稱歎甚深微妙難解之法。爾時舍利

弗敢重宣此義。而說偈言

慧日大聖尊 久乃說是法 自說得如是

力無畏三昧 禪定解脫等 不可思議法

方便品第二の一部に施されたもので、經本文の当該字から起筆して  
いる。「自」「不」は右肩から起筆し、「法」は下中から起筆して、そ  
れぞれの波線は三行又は四行にわたっている。

これを前掲の④⑩妙法蓮華經卷第一（初雕高麗版以前刊）に施され  
た声明譜と比べると、方便品第二の同じ「自」「不」「法」に加えら  
れていて、しかも起筆位置も「自」「不」は右肩、「法」は下中であ  
つて同じである。しかし、波線の形が異なっている。④⑩妙法蓮華經  
卷第一には、先述のように、「孝寧大君補」以下の刊記があり、角筆  
によるハングルの書入れもあるから、声明譜の書入れも十五世紀後  
半以降である。初雕高麗版以前刊の④⑩妙法蓮華經卷第一に施された  
声明譜との、波線の形の違いは、時代差による変化を示すのか、宗  
派による系統差を示すのか、或いは他の理由によるのか、今後の検  
討課題である。

右掲のように、行を越えた横長の波線が經本文に直接に書入れら  
れたのは、角筆の凹みによつて施されたからであろう。毛筆による  
墨色（40）の声明譜では經本文の字句を汚損することになるので、書

入れは行間に止まることになるが、色の着かない角筆ではそれが可能となる。

II-7 角筆の注音符

本文中の注意すべき語句の右傍又は左傍に、角筆を以て縦長線を施したものが、次のようにある。(縦長線が角筆)

㉓ 弥勒菩薩所問經卷第二 (初雕高麗版)

以ノ是義故大海慧菩薩經中說菩薩

㉔ 近思錄 (正統元年・一四三六刊)

以為未足於是又訪諸積老之書 (卷第十四、十二丁表6行)

㉕ 論語集註大全卷之九 (十五世紀前半刊)

子曰後世可畏焉 (二十二丁裏10行)

㉖ 誠初心学人文 (隆慶四年・一五七〇刊)

蝸入胤宮雖有才智居邑家者 (六丁表2行)

㉗ 法華經卷第二ノ卷第七 (十七世紀刊)

過是數已有世界名淨光莊嚴其国有仏 (卷之七、二丁表4行)

㉘ 齋仏願文、至心懺悔、至心發願 (十九世紀写)

淨土現前仗仏威光、經登上品伏願 (二丁表10行)

十一世紀刊本から十九世紀写本まで認められる。

このような注音符は、中国大陸の文献に用いられていて、敦煌文献にも角筆で書入れたものが種々ある(41)。

以上、この項は韓国で見出された五十点程の角筆文献について、そ

の角筆による書入れの内容を整理して、文字と符号にわたって報告した。その加點の仕方には、漢字や口訣(仮名)を始め、ヲコト点以下、節博士に至るまで、日本の古訓点と基本的に共通するものがある。無論、少異もあるが、加點法について韓国と日本との關係を考へるのが、今後の課題の一つである。それには何よりも、韓国の諸所に遺存する古文獻の中から、更に多くの角筆文献を發掘することが必要である。(以上、この項、小林)

注

(1) 小林芳規「敦煌の角筆文献―大英圖書館藏「觀音經」の加點―」(「訓點語と訓點資料」第九十六輯、平成七年九月)。同「敦煌文献に加點された角筆の符号と注記及び本邦の古訓点との關係」(「訓點語と訓點資料」第一〇〇輯、平成九年九月)。

(2) 小林芳規「角筆文献目録(一九九一年版)」『角筆文献目録(一九九九年版)』(私家版九冊、平成四年五月ノ平成十二年三月)。

(3) 二〇〇〇年二月における西村の調査の実情については、西村浩子「大韓民國における角筆文献發掘調査報告」(「松山東雲女子大学人文学部紀要」第九卷、二〇〇一年三月)に具体的に述べてある。

(4) 小林芳規「日本에 있어서角筆文献연구의 現状과 展望」(「口訣研究」第六輯、二〇〇〇年十二月)(韓国語訳は尹幸舜助教教授による)に講演内容が載っている。

(5) 李丞宰「새로 발견된 자필(角筆) 부호구 결과 그 의의」(「新國語生活」)國立國語研究院、二〇〇〇年 第十卷第三号、秋)

南豊鉉「高麗時代の點吐口訣에 대하여」(「書誌學報」第二十四

集、二〇〇〇年十二月、二〇〇一年五月刊)

- (6) 「複星点」の名称は、築島裕「天台宗のヲコト点について」(「訓点語と訓点資料」第三十二輯、昭和四十一年二月)による。「  
」を二つ重ねたヲコト点、これを「複星点」と仮称する」とされ、  
「この複星点は、天台宗所用ヲコト点の特徴であったと推定する  
ことが出来る」と説かれた。

(7) 注(5) 文献の南教授論文。

- (8) 注(5) 文献の南教授論文に「類音字に表記した例」(日本語訳)として挙げられている。

(9) 注(5) 文献の南教授論文。「怕」には注音字「朴」を施すのに  
対して上字「懽」には声調を注記する類例を得たい。

- (10) 注(5) 文献の南教授論文。十八字の口訣字のうち、「三」(原  
漢字も「三」)が、墨書口訣資料の、十二世紀初の華嚴経疏(表  
では十一世紀末乃至十二世紀初とされる)にだけ現れて、それ以  
後の訓読口訣資料に見出されない故に、瑜伽師地論の角筆の口訣  
が十一世紀のものである可能性が裏付けられるとしている。

(11) 注(10) 文献参照。又、この瑜伽師地論に施された角筆のヲコ  
ト点の中に、「略」に「 $\text{ㄥ}$ 」/「 $\text{ㄨ}$ 」/「 $\text{ㄩ}$ 」/「 $\text{ㄨ}$ 」/「 $\text{ㄩ}$ 」  
辞が付いて、副詞として用いられた用法があり、十二世紀以後の  
墨書訓読口訣に現れない古形であることを、南教授が同論文で指  
摘している。

(12) 前掲のように、南教授の教示による。

(13) 「孝寧大君補／臨瀛大君瑒」に始まる刊記によって知られる。

(14) 小林芳規『角筆文献の国語学的研究』(汲古書院、昭和六十  
二年七月)の第四章「角筆文献の言語の性格」において、「言語

の歴史的な変化の結果が、毛筆文献に比べて、角筆の方にいち早  
く現れる」(六六六頁)と説いている。

- (15) 小林の摘記した移点資料、並びに、瑜伽師地論卷第八は伊助教  
授を通して八月に、瑜伽師地論卷第五は南教授から十一月に、全  
巻移点資料の複写を恵与されたもの、又、大方広仏華嚴経卷第五  
十七と同卷第二十二の全巻移点資料の複写を南教授から十一月  
に恵与されたものによる。尚、瑜伽師地論卷第五・卷第八の全巻  
移点資料は「角筆口訣資料」の冊子に整えられ、二〇〇一年四月  
の訪韓調査の折に、李丞宰教授より恵与された。南教授・李教授  
はじめ関係各位の御厚情に深く感謝の意を表す。

(16) 注(5) 文献のうち、南教授論文。

(17) 現代日本語の「ガ」と古典語の「イ」とでは、用法に差異があるの  
で、平安初期訓読に用いられた「イ」を当てた。「アル」と「ナリ」  
の扱いも同種。

(18) 南教授のヲコト点解説に基づいて、全巻を読解して得た所を日  
本語で示した。これには、今後の補訂が必要となろう。

(19) 複星点を短線より先に配したのは、瑜伽師地論(A種)による  
と、複星点を繋いで「 $\text{ㄥ}$ 」/「 $\text{ㄨ}$ 」/「 $\text{ㄩ}$ 」のようにして、短線にした  
形が見られて、ヲコト点の符号を作る順序としては複星点が先で  
あったと考えられることによる。又、日本の天台宗系統のヲコト  
点が複星点を使っている、点図集によると、星点の次には複星点  
を置き、短線はその後に配していることも参照した。

(20) 誠庵古書博物館蔵の④六十卷本大方広仏華嚴経卷第二十(十世  
紀刊)一卷に施されたヲコト点は、B種の大方向仏華嚴経(新訳)  
のヲコト点と比べると、星点図の「し」(ヲ)「下」(尊稱呼格)「

「七」(ニ)「三」(ユエ)「分」(テ)「一」(ハ)「一」が一致している。しかし他の星点や複星点以下は一致しない。

(21) 例えば、瑜伽師地論卷第八の、

a 又顯非撥流轉士夫故(第十七張)

b 盡壽行故。久遠行故者(第十八張)

a の「士夫」の「夫」の下辺中に「・」が施され、b の「盡壽行」と「久遠行」の「行」には、下辺中に「丨」が施されている。a も b も、「故」に上接していて、用言の連体形(a では「顯」、b では「行」)を受けて、「故」に続ける働きをしている。日本語の訓読では、連体形を受ける「が」の働きに通ずる。

(22) 韓国でも、十四世紀に墨書で加点了「法華経卷第七」になると、

星点と複星点と短線の他に、鉤「フ」「リ」「ヤ」「丨」「上」等の符号が用いられている(南教授の注(5)文献)。

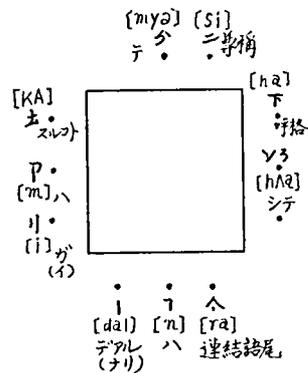
(23) 李教授の教示による。筆者は星点図についてこの事を指摘したが、星点だけでなく複星点や短線等も同様であることを確認した。二〇〇一年四月の訪韓調査による。

(24) 別に考察する予定である。四隅・四辺の外側に星点を施した日本の古点本としては、平安初期に例えば知恩院蔵大唐三蔵玄奘法師表啓平安初期点(第三群点)等がある。

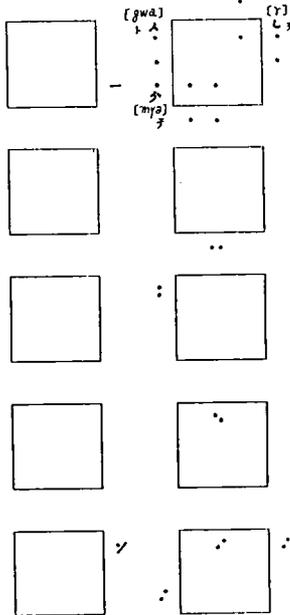
(25) 注(5)文献の南教授論文。内側を用いないのは、韓国の加点的材料が墨点であって、白点・朱点でないことも保っている。

(26) この異なる釈読と異なるヲト点法が、加点者の単なる別案を示したものか、或いは別系統の移点本があつてその反映であるのか、又は他の意味があるのか、多くの類例を得て検討する必要がある。

(27) 注(5)文献の南教授論文にヲト点図が示されている。その星点図を示す。音注(ローマ字)と日本語訳(片仮名と文法機能表示)は尹助教の教示による。



(28) 善見毘婆沙律卷第九の角筆のヲト点図を示す。



(29) 注(5)文献の南教授論文によると、「フ」/「丨」/「上」/「一」は高麗時代の釈読口訣では「善」(旧仁)、「能」(金光明)のように副詞派生接尾辞として使われた」と説かれる。句点と「フ」点とはヲト点図第一図に掲げたように、位置が接近

している。瑜伽師地論のヲト点では、施す位置に屢々ずれがあることは前述の通りである。

- (30) 句点と「クテ」点とは接近していて紛らわしいが、仔細に見ると、句点は漢字の左下隅の筆画に殆ど接するように施されるのに対して「クテ」のヲト点は、漢字の左下でやや内寄りにあり、句点に比べて筆画より離れて施されている。瑜伽師地論のヲト点図において、漢字の右下隅の筆画に殆ど接して句点が施され、「クテ」のヲト点は漢字の右下でやや内寄りにあり句点に比べて筆画より離れて、「名為く」のように施されているのが、参考になる。

- (31) 返読と兼用した熟字の合符が、左寄りに施されたのは、返読と兼用して左寄りから起筆した方が書き易いということも考えられるが、中央から起筆することも可能であった筈である所を、総て左寄りに起筆しているのは、aの体言の場合と区別して位置を異にしたことを示すと考えられる。

- (32) 「三種染」についての認定の問題か、或いは先行加點本を移点する場合の誤点の可能性などが考えられる。起筆位置にやや曖昧な例が見られるのもこれに係るか。

- (33) 敦煌文献の観音経 (S. 556) (戊申年 (九四八) 幸深書写読誦) に、角筆で書入れた合符が、位置 (中央か左寄りか) によって用法を異にしている (注 (1) の小林芳規「敦煌の角筆文献—大英図書館蔵「観音経」(S. 556) の加點—」訓点語と訓点資料第九十六輯)。又、日本の十世紀加點本の乙点図 (慈覚大師点) や漢籍点本でも、位置 (中央か左寄りか) によって、音合と訓合とを区別している。

- (34) 小林芳規「無畏三藏禪要の角筆点」(仁海僧正九百五十年御遠忌記念 隨心院聖教類の研究』汲古書院、平成七年五月)。

- (35) 注 (33) 論文。

- (36) 趙炳舜館長よりファックスで送付された資料による。第二回目調査から帰国後の二〇〇〇年十一月二十日に受信した四枚による。

- (37) 注 (14) 文献九九九頁。

- (38) 注 (1) 文献。

- (39) 再雕高麗版のこの二文献の節博士は、形が異なり横線の起伏の変化で表しているらしいが、正確な採取が出来ていない。再調査が望まれる。

- (40) これまでに調べた限りでは、韓国においては十一世紀以前には、経本文の加點には朱書・白書は見られず、角筆の書入れが主となっている。

- (41) 注 (1) 文献。

#### 〔謝辞〕

韓国における角筆文献の調査とその成果は、南豊鉉教授を始め李丞宰教授、康仁善副教授、尹幸舜助教授の御世話と御協力の賜物である。貴重文献の閲覧調査に当っては、誠庵古書博物館の趙炳舜館長の格別の御厚情と御世話を賜り、高麗大学の鄭光教授、延世大学の林龍基教授、並びに檀国大学、東洋学研究院資料室、東国大学校中央図書館、高麗大学校中央図書館、延世大学校中央図書館の關係各位、又、湖林博物館の李喜寛学藝研究室長と關係各位の御高配と御世話を忝うした。

